



困難な時期にこそ高い志を

代表取締役会長 山口 敏 明

我が社の研究開発活動は、現在二つの大きな困難に遭遇しているものと思われる。

第一の困難は当社事業環境の悪化に基因するものである。80年代の後半当社は順調な環境の中で、研究開発について積極的に経営資源を投入することが出来た。研究開発のための人と金の急速な増大である。売上げに対する技術・研究開発費の割合を2%台から7%強にまで一気に増加させた。しかし90年代に入ってから状況は悪い方に変化した。目下の経営環境では、現在のレベルは維持しなければならないが、80年代後半のような増加は暫らくの間望めないものと判断せざるを得ない。研究開発のための人・金が増えない中で、成果についてののみはより大きなものを産み出すことが強く求められているという困難さである。

第二の困難は我が社だけではない。研究開発に共通の問題である。それは革新的な技術や製品が生まれ難い時期に差ししかっているという懸念に由来する。特に化学やケメカトロニクス分野でブレークスルーの可能性が可成り低くなっているのではないか。今ここで化学技術史を論ずる紙面の余裕はないが、少なくとも技術開発の長期循環の停滞期と思われる時期に創造性のある、価値の高い開発を達成するためには、大変な困難が伴うことは推測出来る。

このような二つの困難に直面して、研究開発に携さわる人は如何に考え行動したら良いのか。私としては少し古い表現だが「志を高く抱け」と敢て要望したい。志とは目標を定めてそれをなすとげることがを心に決めることである。その目標を断乎として高いものにして貫きたい。高い目標を達成するには強い意志と優れた能力が求められる。情熱と努力の集中そして持続が必要である。自己とグループの能力を高めるための勉強と切磋琢磨が不可欠である。人並み、まあまあでは困る。安易な妥協や、惰性の研究は許されない。繰返すが高い目標の設定が最も大事である。

一人一人の研究者がそしてグループが、更には研究所全体が、今一度心を新たに志を抱いて貫きたい。

困難な時期だからこそ高い志を抱くべきであると要請する。高い志があって始めて諸々の困難を克服して立派な成果が得られるものと信じている。

以 上